



ありあけ

●発行日 2009年6月1日
●編集 会報編集委員会

●発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
ホームページ http://dousou.saga-u.ac.jp/

「農学部と同窓会の意見交換会」を初めて開催



松尾同窓会長

野瀬農学部長

平成20年12月3日に佐賀大学農学部と同窓会の初めての意見交換会が「グランデはがくれ」(佐賀市)で開催されました。農学部から野瀬学部長をはじめ6名の先生方、同窓会から松尾会長など9名の役員代表や同窓生が参加しました。

意見交換会は、まず野瀬農学部長から「農学部の課題や同窓会への期待等について」話題提供していただき、その中から、大学院研究科の改組に伴う農業版 MOT (高度な農業技術者を養成する実践的なプログラム)の取組状況や考え方などについて意見交換が行なわれました。

目次

農学部と同窓会の意見交換会を初めて開催... P 1
退職教員からのメッセージ..... P 2 ~ 4
・近藤先生、内田先生、甲本先生、 武田先生、松尾先生
研究室紹介..... P 5
(生命機能科学科 生化学研究室)
農学部同窓会の動き..... P 6
・同窓会長賞の授与
・キャリアデザイン講座 ほか

会員の広場..... P 7 ~ 9
・佐大への提言(Ⅱ) 平山 伸氏
会員の情報(博士号取得)..... P 9
・服部真彰氏、進藤直文氏、松本 勝氏
支部だより..... P 10
・佐賀県庁支部、佐賀県支部
トピックス..... P 10
・佐賀大学卒業式、入学式
編集後記..... P 10

退職教員メッセージ



お世話になりました

近藤 栄造

(線虫学)

動物園の飼育係、大工さん、昆虫採集人になることが、子供の時の夢であった。この夢の延長線上に理学部生物学科、工学部建築学科、農学部農学科があった。卒業しても学校の先生ぐらいしか職がないぞと脅かされて、進学希望リストから理学部が落ちた。工学部受験には、模試の数学の点数が足りなかった。残ったのが、農学部。振り返ると、残り物には福があるというのは本当であった。

佐賀大学に赴任した時の第一印象は最悪であった。平日なのに、学生はお祭り騒ぎで、勉強する雰囲気はゼロ。ひどい大学だと思ったのは、誤解であった。赴任日は、6月1日。佐賀大学の創立記念日で大学祭。こんな日に勉強するのは異常で、遊ぶのが正常であった。

自然が好きな私は、佐賀が気に入った。緑豊かな平野を自転車で走り回った。ワングル部主催の唐津ロードに

参加して、夜道を唐津まで歩いた。三瀬峠を越えて福岡天神まで歩きもした。研究室の学生とは、ソフトボールや卓球を楽しんだ。26歳から46歳までの助手時代は、学生とともに過ごす時間や研究時間があり、ハッピーであった。

助教授になって授業を担当し始め、調子が狂った。準備して授業に臨んだ筈なのに、興味を持ってもらえない。困った挙句に辿りついた結論は、受講生に助けてもらうこと。受講生に書いてもらうコメントを中心に据えた授業に切り替えて、聞いてもらえる授業になった...と思うのは錯覚か。

教授になって、さらに調子が狂った。自分で実験する楽しみが激減した。全学教育センター長を担当した時は、運悪く、佐賀大学と佐賀医科大学の統合、大学評価・学位授与機構による教養教育評価、国立大学の法人化と重なってしまった。待たなしの義務的作業に明け暮れ、研究と教育は痩せ細った。研究室に来てくれた学生たちのための時間的なゆとりは失せた。

本年3月末日に、38年と10ヶ月お世話になった佐賀大学を定年退職した。この間、実に多くの人に支えられてきた。感謝を申しあげたい。これからは、授業のことは忘れて、線虫学を楽しみたい。



自立した学生たち

内田 進

(生産システム情報学)

平成元年5月、学科が改組し、新設の生産情報科学講座(生物生産学科生産システム情報学分野)に情報処理教育担当教員として赴任したときは、指導する学生もなく、しばしば、隣の農業機械学研究室を訪ねた。5名の学生がいるというが4年生の一人が時々現れるだけで、薄暗い部屋のこともあって活気がなかった。そこで、彼ら呼び寄せ、自前でリフォームすることを提案し、天井のペンキ塗りから着手した。最初は一人が二人であったが、壁塗りが軌道に乗り始めると、全員が参加し、あつという間に、見違えるような明るい部屋ができあがり、彼らとの連帯感が深まった。

それから1年、やる気のある新学科の学生が専攻して

きた。JA 佐賀経済連、佐賀県茶業試験場、佐賀県農業試験場などの協力を得て、佐賀平野(米麦、茶)を舞台に活動した。就職もITバブル期で順調であった。その後、住宅バブルの崩壊が始まり、国の財政が悪化すると、大学を売り込む方向(法人化)へと向かい始め、佐賀大学では市民向けのオープンキャンパス(実行委員長を担当)を全学部で開催し、研究室の学生は、米の食味評価の模擬実験やビデオ製作にチャレンジした。

そして、国立大学の法人化がやってきた。科学技術共同開発センター長を担当し、地域との産学連携を目指し、その一環として学生ビジネスプランコンテストを立ち上げた。研究室の学生を中心としたグループも応募し、優秀賞を獲得した。振り返ると、この19年11ヶ月の間に自立した81名の素晴らしい学生たちとの出会いが最高でした。

本年3月31日付けで、多くの思い出をくれた佐賀大学を定年退職しました。農学部同窓会の皆様、大変お世話になりました。心からお礼を申し上げます。これからは、放送大学佐賀学習センターの客員教授として佐賀県農業に貢献できればと思っています。



佐大で 31年間熱中した 軟弱地盤研究

甲本 達也
(環境地盤学)

同窓会の皆さんお元気ですか。私は農学部生物環境科学科環境地盤学教室に籍を置いた甲本です。1978年、当大学に赴任以来、31年間の教育・研究生活を送り退職いたしました。この間、軟弱地盤について思うが俛に研究させて頂き感謝しております。ここにその研究の一端をご紹介します、ご挨拶とします。

コーン及び杭の支持力解析：本学赴任後、早速、ライフワークの「コーン及び杭の支持力解析」を、有明軟弱地盤を対象に着手しました。

1984～85年、この分野では世界的権威であるカナダのマイヤホフ教授（2003年1月逝去）の下で研究する機会を得ました。実験室の装置類は博物館行きの古いものでしたが、彼は国から科学研究費を得ており、年間2人のポス・ドク研究者を雇い、研究を進めていました。日本も教員の裁量で研究者が採用できれば、世界から優秀な若いポス・ドク研究者を集めることができると羨ましく感じたものです。この時の成果を含めた研究論文に対し農業土木学会学術賞を頂くことが出来ました。

「箱型基礎工法」開発：佐賀平野、特に白石平野は地盤沈下地帯です。過去に農業用水の汲み上げによる地下水位低下が原因で2mも沈下しています。この種の地盤に用いられている支持杭工法は、構造物はそのまま地盤だけが沈下し、水道・ガスなどのライフラインに被害がでるという問題を引き起こします。そこで当時盛んになりつつあった地盤改良杭工法を応用し、粘土地盤中に重箱を逆さまにして押し込んだような「箱型基礎工法」

を開発しました。まず白石平野において実物大の現地モデル試験（沈下抑制効果検証）を行い、1991年に宮崎市（厚さ約40mのシルト層上に7mの砂層が乗る「2層地盤」）において7階建てマンション基礎に実用化し、1996年に佐賀県有明町の干拓地（厚さ約20mの有明粘土地盤）においてJA白石「稲の育苗センター」の基礎として施工しました。いずれも機能を果たせており、安堵しております。

ジオポリマー研究：社会基盤作りに欠かせないセメントは、その製造に当たって2重にCO₂を排出（①粘土と石灰岩<CaCO₃>を混ぜて燃焼する時と、②CaCO₃ CaO + CO₂の分解過程で）します。1tの生産に1tのCO₂を排出するといわれているほどで、環境保全上、代替の材料開発が求められています。そこで、現在、ジオポリマーに着目しており、産業廃棄物であるフライアッシュ（石炭灰）を有効利用できないかと考えている次第です。研究室では、フライアッシュをベースとするジオポリマー開発と「有明粘土の固化」への利用について取り組み、2007年、文科省「海外先進研究支援プログラム」研究員としてカセサート大学（タイ）での「バンコック粘土の固化」について共同研究を行いました。インドネシアからの博士留学生M・シノルンガンさんとは、ジオポリマーを母国の「汚染湖底堆積土の固化改良」に利用すべく実験研究を行い学位論文として取りまとめることができました。さらに今年2月、佐賀県との共同研究で洗掘崩壊したクリーク斜面の修復に、ジオポリマー擁壁工法を試験施工し一定の成果を得ています。今後は、数百kmある「クリーク改修」や数千個の「老朽ため池堤体の改修」への利用に意欲を燃やしているところです。

ぜひ、同窓会の皆さんには、農学部内で行われているさまざまな研究に着目され、地域貢献に役立てていただくと幸いに存じます。長い間本当にお世話になりました。



佐賀大学での一断想 ～人のご縁と調査研究の場を いただいた12年～

武田 淳
(地域資源学)

佐賀大学農学部に着任したのは、平成9年（1997）年4月になります。ちょうど12年間在職させてもらい、ちょうど干支（えと）でいう十二支を一巡した月日になります。当時、三号館の地域資源学分野には既に教養部から異動されていた集落地理学の五十嵐勉さん、また環境社会学分野には文化人類学の細川弘明さんがおりました。生態人類学専攻の小生の赴任から半年後、平成9年10月に関

西学院大学から藤村美穂さんが農学部初の女性教官として環境社会学分野に赴任して、三号館はフル・スタッフになり、農学部の一翼を担う態勢が出来上がりました。その後、平成13年3月に細川さんが京都精華大学に異動したため、その後任ポストに平成14年4月熊本大学から人類生態学の稲岡司さんが着任し、現在に至っています。

紅一点の藤村さんの参入から、三号館はもっとも和んだ研究棟として重宝がられる一方、卒業研究を修めたいと志望する学生も増え続け、「よく遊びよく学ぶ」学生諸君が数多く輩出していきました。三号館は人文科学系であるため、農学部本流からすれば、マージナルで学際的な研究分野に属しています。しかし農業、漁業や林業などを担う人々の社会、暮らしぶり、自然環境や生業などの諸側面を明らかにするのに不可欠な現場重視の現地

調査（フィールド・ワーク）を必須科目として課していることは、社会に出てから三号館出身の学生諸君を大きく羽ばたける原動力になっていると自負します。

赴任したころは、野瀬昭博先生（現・学部長）や藤田修二先生（現・評議員）が夕方、構内をジョギングする光景をよく見かけたものですが、独立行政法人化の前後あたりからか、いつしかその姿が見られなくなりましたように思われます。自分の研究以外の大学業務が急激に増えて忙しくなられたころだと思いますが、その成果が今の両先生のご健康につながっているのは嬉しいことです。佐賀大学で小生が関わったことで、一つだけ印象深く心に残ることがあります。赴任した翌年に佐賀大学同和・人権問題委員会の全学委員長をさせられました。同委員長の権限として毎年一回学内で開催される講演会の演者を選べます。そこで、白羽の矢を立てたのが岡山県倉敷市に在住する永瀬隆さんでした。詳しい講演の内容は会報（1999 No. 22 pp. 1 - 16）に譲るとして、

講演中で敷衍された話の一つに永井道雄さん（元・文部大臣）の長兄・明雄さんのことがありました。当時、ビルマで海軍主計将校として働いていた明雄氏は、戦後、12万あまりの日本兵全員を連合軍が配船した帰還船（リパティー・シップ）で日本に送り出し、最後の船に乗られて帰国する途上のバシー海峡に身を投げたのです。この講演で永瀬さんは、人間として生きるためにあまりにも美しくも実に感動的な話をいくつもされ、聴衆の心を揺り動かし、豊かにしてくれました。

最後に、今後の佐賀大学農学部と同窓会の益々のご発展を祈念すると同時に在職中、多くの異業種の方々との「ご縁」と有明海という「干潟の調査研究の場」をいただいたことに心から感謝しています。またスーパー長男のごとく身勝手に振る舞うことを許してくれた道祖元町の松尾金次さんファミリーと三号館の先生方々、そしていつも励ましの言葉をかけてくれた諸先輩にこの紙上を借りて、深く感謝の意を表します。



定年退職を迎えて

松尾 隆明

（農業生産機械学）

佐賀大学農学部同窓生の皆さんこんにちは。平成21年3月31日付の退職の人事異動通知書を学部長よりいただきました。私は昭和43年4月より、旧農業土木学科農業機械学研究室（現在の生物環境科学科資源循環生産学講座農業生産機械学の研究分野）を担当してきました。農業機械学研究室は昭和37年4月に農業土木学科の4講座の1つとして誕生しました。初代教授は芳村多一郎先生、二代目田中栄三郎先生、三代目が藤木徳実先生で私が四代目になります。農業土木学科の創設は当時、有明海の干拓事業が進行中で、干拓工学研究室を中心とし、土地改良学、農業造構学そして私の農業機械学研究室の4つでした。農地改革後の農地の整備いわゆる圃場整備や農地造成が行われました。これに加えて、農作業における重労働からの解放と農作業の効率化や機械化の必要性が叫ばれた。この頃、全国の大学や国や県の試験場に農業機械研究室ができました。私が農業機械学の研究にかかわった時期がわが国の農業の機械化の創始期であり、現在の農作業の機械化体系がほぼ完成した時期に退職ということになりました。助手時代は学科の30数名の学生に実験、演習を担当し、研究は教授、助教授のお手伝いをしました。研究テーマとして「農作業の合理化に関する研究」「農作業の労働強度に関する研究」や「有明海沿

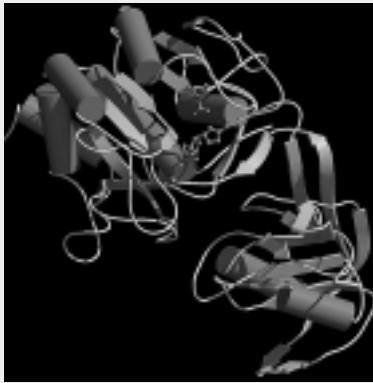
岸農地の有効利用」等大型農業機械の導入に際して問題となる農地の沈下やそれに伴う農業用車両の走行性に関する研究を行いました。また「機械化一貫作業体系の確立」は経営規模別の農作業の機械化に関するもので機械の導入に際しての指針を示し、広く活用されました。昭和50年代は田植機、刈取結束機（バインダ）等の普及により、更にはコンバイン収穫機の開発、普及により大量収穫のため収穫後の乾燥調整施設の設置が必要とされ、全国でライスセンタ、カントリエレベータやドライストア等の共同乾燥調整貯蔵施設が作られました。この時期にはこれらの施設に関する研究として「ドライストアによるばら初めの長期貯蔵試験」や「貯蔵ビンによる玄米大量貯蔵実験」等を行いました。昭和60年代から平成になってからは主に「農用車両の走行性に関する研究」を行った。これは圃場整備による圃場の集積化や大区画は大型の農業機械の導入を可能にしましたが、大型機械の軟弱地盤における走行性が懸念された。これの解明のため、コンバイン収穫機の運動特性やコンバイン走行部のゴム履帯の作用特性を力学的に解析し明らかにしました。このように退職直前まで水田や畑地の土と農用車両のゴム履帯や車輪との相互作用の解明を研究テーマとして行ってきました。私の在職中の研究を振り返ってみますといつも後悔と反省のくり返しでした。幸いに、良き先輩や同僚、また、良い学生諸君にめぐり会えたことや在職中、健康を保ちつづけられたことに感謝しています。また、最終講義や退職パーティには多くの卒業生の御出席をいただき御礼申し上げます。退職後は大和インター近くの狭い畑地で作物栽培をしようと思っています。最後に佐賀大学農学部及び同窓会の益々のご発展をお祈りします。

シリーズ③ 研究室紹介

生命機能科学科 生化学研究室

本研究室は、生命現象の根幹となるタンパク質の分子構造解析、機能発現機構の解明、タンパク質工学についての研究と教育を行っています。私・渡邊啓一、佐藤孝准教授、本島浩之助教が担当しており、2009年4月現在、博士課程2名（内バングラディッシュ留学生1名）、修士課程5名、学部4年7名、交換留学生2名（韓国）が所属しています。

現在の主な研究テーマは、氷温付近でも活発に増殖する南極産好冷細菌を材料に、低温酵素の活性発現機構の解明、それに酵素活性や安定性を変えるためのタンパク質工学的方法の開発です。タンパク質が固有の機能を発現するためには、その構造の動きが必要です。私たちは、



低温タンパク質分解酵素の構造

タンパク質構造の中にひそむ機能に必要な動きを生み出す仕組みを知ることを目指しています。応用面においては、低温酵素は食品加工、洗剤、研究用

試薬などにおいて有用性が高いと考えられます。最近、私たちは、低温タンパク質分解酵素の構造と機能を解析し、その知見に基づき中温酵素に対して柔軟性を増すための変異を導入し、低温活性の高い酵素に変換することに成功しました。このような私たちの研究に欠かせないのが、輝度の高いX線を発生するシンクロトロン光施設です。2005年、鳥栖市で佐賀県立九州シンクロトロン光研究センターが運転を開始し、ここでタンパク質構造解析を行える日も目前に迫ってきました。

研究者を目指す大学院生は、国際シンポジウムでも積極的に発表しています。2008年度は、博士課程1名と修士課程2名の学生が韓国と台湾で英語による口頭発表を行い、活発な討論と



国際学生研究発表会（2009年3月、台湾 Yuanpei 大学）

国際交流を行いました。今年の8月には、3ヶ国（韓国、中国、台湾）



の6大学から、生命機能科学関係の教員と大学院生を招き、菱の実会館と国民宿舎波戸岬で合同集中講義と研究発表会を開催します。

これまでの学部卒業生、大学院修了生の進路は、食品・製薬関連企業、大学院、公務員、教員などでしたが、2008年度は、食品系企業の技術者・研究者が6名、医薬品1名、商社1名、証券会社1名、大学院進学3名で、これまでより幅広い視点から職を考える学生も出てきています。将来、どのような職に就こうとも、研究に真剣に立ち向かった経験は、必ず役立つものと信じています。

渡邊 啓一



生化学研究室メンバー（平成20年度卒業式）



農学部同窓会長賞を野村沙織さんら2名受賞

佐賀大学農学部を卒業するに際し、他の模範となる功績があった者に贈られる農学部同窓会長賞が、去る3月24日ホテルニューオータニ佐賀で開催された第20回佐賀大学農学部卒業祝賀会の席で松尾同窓会長から野村沙織さんと城内文吾さんのお二人に贈呈されました。

お二人の功績は、野村さんが第62回日本栄養・食糧学会九州・沖縄支部大会で発表された「ブルーベ

リー葉熱水抽出物分画物の栄養生理作用に関する研究」で優秀発表者賞を受賞されたこと。

また、城内文吾さんは平成20年度日本農芸化学会西日本支部奨励賞(学生)選考において「食事リン脂質によるメタボリックシンドロームの予防・改善に関する研究」が最もふさわしいと認められたことのほか3つの学会賞を受賞されたことによるものです。



松尾同窓会長から会長賞を授与



受賞のお二人(右:城内さん、左:野村さん)

キャリアデザイン講座

平成17年から全学の2~3年生を対象に開催されている講座で、大学側も高い評価を受けています。

昨年度は宇宙航空研究開発機構に勤務されている永松愛子(新姓・伊藤)さん(H9年卒・遺伝子工学)と佐賀県畜産試験場の脇屋裕一郎さん(H4年卒・動物生産生理学)のお二人に担当してもらいました。

お二人は、現在の仕事の楽しさやこれからの夢などについて語られ、出席した学生を魅了していました。



永松愛子さん



脇屋裕一郎さん

就職ガイダンス

就職ガイダンスは農学部と同窓会の取組みとして平成16年から実施しております。

昨年は、Fコープ生協(永淵孝則さん(S62年卒・農経)と伊藤泰亮さん(H20年卒・生物生産学))、JAさが(納富俊明さん(S56年卒・農芸化学)と森永修平さん(H18年卒・熱帯作物学))、山崎製パ

ン(深田圭一さん(H20年卒・生物生産学科)と向井賢吾さん(H20年卒・応用生物科学科))の3社から就職指導をしていただきました。

以上のほか、農学部1年生を対象に実施している「大学入門科目」については、田崎晋さん(H7年卒・応用生物、和光純薬工業勤務)が担当されました。

会員の広場

佐大への提言（Ⅱ）

横浜市 平山 伸

（S60年卒・生物化学）

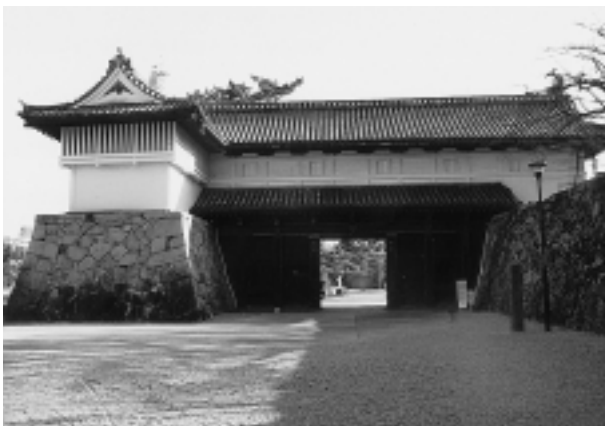
数年前まで佐大には共同研究や講演会で度々訪問し、同時に他の国内外の大学へも行く機会を得て、その際、佐大ではどうだろうか？という考えがいつも頭の中を巡っていた。その経験から外から見た佐大について感じたことを紹介する場として前号に投稿させて頂いたが、今回は2回目の投稿である。

西の大関と云われた旧制佐高の伝統を受継ぐ佐大が活力あり、益々人気のある大学になることを願って、幾つかアイデアを紹介したい。

1 正門の改良

佐大本庄キャンパスがテレビで紹介される場合、ラクウショウ並木から映像が始まることが多く、ラクウショウ並木が佐大のシンボルとなっていることが容易に伺える。そのため、正門から菊楠シュライバー館までの空間を、佐大のシンボルとして徹底的に磨きブランド化していく必要性を感じている。現に、首都圏や九州の近隣の大学から知人を佐大にお連れした経験から、初めて佐大を見られた方々はラクウショウの並木に対し異口同音に感動の言葉を発せられ、ブランド化の潜在性はきわめて高い。

そこで提案したいのが、正門の改良である。現在の正門は、趣のあるラクウショウから菊楠シュライバー館までの空間に対し、やや脆弱な印象で折角の趣を低減させている。改良の視点としては、佐賀に根付く大学として佐賀らしさを付加することである。例えば、佐賀城鯨の門をモデルに白を基調にしたデ



佐賀城鯨の門

ザインも想定され、東京大学の赤門に対抗し、通称、白門と呼ぶようにするのも面白い。また、東大赤門のような武家屋敷のように屋根を造ることも想定される。あるいは、佐賀城鯨の門（添付写真参照）を規模を最適化した上で、そっくり再現して観光名所に仕立てることも考えられる。他には、吉野ヶ里遺跡の物見櫓のイメージの創造や、門に有田・伊万里焼の壺を設置することも地域密着性を表現する手法として興味を注がれる。更に一層格調高い趣にするため、現在の正門に設置されているやや殺風景な鉄格子のゲートにカササギのデザインを付加することも必要になろう。目指すは、多くの人が正門でラクウショウを背景に記念写真を撮りたくなる空間の形成である。更に、この空間を大学案内等に積極的に掲載しブランド化していくことも必要であろう。上記のように正門改良に常識を超える投資を行うことで、映画やドラマの撮影場所としても活用され、佐大のPR効果が波及的に増大するものと確信する。

いずれにせよこれらのデザインには都市工学科や文化教育学部の助言も想定され、同窓会からの資金援助も検討しては如何だろうか。

2 エコキャンパスの推進

佐大はエコアクション21を取得し、環境負荷の少ない活動を推進されている。この中で冷暖房費の抑制は環境負荷低減と共に、余計な支出を抑制することにも直結する。特に、夏場が暑い九州では冷房費の抑制に対し知恵を絞る必要がある。その適用可能性のある技術や対処法を紹介したい。

一つ目は、南側の窓に光熱フィルターを張り、冷房費を抑制することである。佐賀新聞によれば福島県のベンチャー企業が開発し、鹿島市のパン製造・販売企業が実施許諾権を得ており、1㎡当たり15万円程度とのことである。

二つ目は、屋上の緑化、断熱塗料の塗布、あるいは佐賀県の企業と佐大が共同開発した発泡廃ガラス素材等による断熱法の設置である。関連するHPを見てみると冷房抑制効果も出ているようなので適用可能は高い。以前、ヒートアイランド抑制技術について大手建設会社研究所の幹部と話をしたことがあるが、技術的に留意すべき点として、1)ピーク温度の抑制と共に、2)蓄熱された熱を速く逃がす素材・方法を選定することである。特に、1)はできても2)ができない技術が多いらしく、少なくとも未施工条件と同等の速度で熱を逃がす技術であることも確認して選定する必要があるだろう。



横浜のビル屋上の風車

三つ目は、屋上への風車（風力発電）の設置である。これらの設置には、NEDO等の各種補助金の活用も視野に入れる必要がある。この中で小型風車について稼働率の向上から適地を見渡してみると、理工学部8, 9号館の屋上やその前の緑地部分である。佐賀平野は一般に風が弱いのが、理工学部8, 9号館はビル風がきついで、現に植樹されたケヤキが風で折れたり、樹木が西側から東側に傾いていることから、一年のかなりの期間、風が強いことが伺える。また、大型風車の学内設置候補場所として冬場の季節風が強い唐津の海浜台地生物環境センター、あるいは、山麓からの吹き降ろし風が期待される資源循環フィールド科学教育研究センター川久保フィールドも想定される。いずれにせよ上記のような各種技術を取り入れ、更なるエコキャンパスの実現をさせては如何だろうか。参考までに横浜・桜木町のビル屋上に設置されている風車の写真を添付するが、形式も多用なものがある。

四つ目は、屋上への太陽電池の設置である。太陽電池設置による屋上面への直射日光の回避による温度抑制効果と共に、発電と売電が期待できる。新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の補助金活用も視野に入れ検討しては如何だろうか。また、製品化された太陽電池を設置するだけでなく、理工学部で開発中の太陽電池をNEDO等の競争的資金を活用して実証施設規模に大型化し、その実証試験として適用することも考えられる。

3 東京事務所の活用

佐大東京事務所が田町から神田に移り、東京佐賀県人会の事務所と合同の場所で活動されている。東京事務所の常勤人員として県人会事務局の方が勤務されており、この場所が佐大の先生方の東京出張時の拠点になっているようである。この活動を更に発

展させ、佐大が実施している海外交流大学との後押しや、国の大型資金獲得の情報収集する仕組みを作りたい。特に大使館へのPR活動は国際交流が盛んな佐大の取組みを後押しできるものと考えられる。その組織には企業OBなどを嘱託職員として安価に採用し、霞ヶ関の各省庁や大使館などへ佐大の取組みをPRしてはと考える。幸い同窓会東京支部に参加されるOBの方々は各分野でご活躍された方も多く、かつ、佐大への強い愛着が感じられ、上記活動への協力・参加も比較的容易に実現できるのではと予想される。また、霞ヶ関のキャリアをリタイヤされた方も多いため、諸外国の動向にもアンテナが高い方も居られる。特に、企業や官庁の現職からリタイヤされ、第二の人生を元気に過ごされている方には、上記仕組みへの参加は理解が得られ易いのではとも考えられる。同窓会と大学幹部の意見交換会の中で、上記アイデアを議論しては如何だろうか。

4 かすみがせき佐賀会の活用

佐賀新聞社主催で佐賀県OBの方を中心とした東京での集いが「かすみがせき佐賀会」であるが、佐賀新聞でこの会の様子を見てみると、佐賀大学との関係が薄いのではと感じる。参加者は各省庁から佐賀県に出向された方で各省庁や国の外郭団体に勤められている方、国会議員、佐賀県にゆかりのある方の参加も見取れる。そこで、この会に大学幹部が出席し、首都圏での動きを把握して大型資金獲得の情報源とすることを提案したい。また、上記の東京事務所の職員が参加されることも想定される。いずれにせよ、首都圏の最新の情報を取得する取組みが必要ではと考えられる。なお、H20年11月には佐賀県人会と合同の佐大成果発表会が開催され、佐大の首都圏でのPRの場になっており、上記と類似の活動をされているが、より政策や国の動向を把握する仕組みとして、かすみがせき佐賀会との交流を提案するものである。かすみがせき佐賀会の参加者からの情報収集や人脈形成は佐大にとってインパクトが大きいと予想され、是非、何らかの形態で、佐大関係者との交流が実現することを願うばかりである。

5 弁理士養成大学院の設置

佐賀大学が所有する特許は国立大学の中で15 - 20番目くらいと多く、国立大学特許資産ランキング(週刊東洋経済2008年10月18日号)では5位と上位にあ

る。この優位性を更に発展させる形態として、弁理士養成大学院の設置の検討をしては如何だろうか。講師には弁護士や弁理士として活躍されているOBを雇用して実学を重視することも想定される。

知的財産を扱う特許事務所は、首都圏に集中しており、地方にとってもこれから浸透が期待される分野と推定される。特に、佐賀県や福岡県は企業誘致が進み、研究拠点を佐賀県や福岡県に移す大手企業もあることから、これからは特許出願などの知的財産の対応需要は益々大きくなるものと予想される。また、佐賀県内の地元企業にも特許取得に注力されている事例が多く、佐賀県の研究機関も特許出願が活発であることが、佐賀新聞社刊「あるある佐賀の底力(下)・(未来編) 押田 努 著」や「佐賀を

日本一元気にする本、押田 努 著」からも見て取れ、潜在需要が多いことが推測される。なお、知的財産関連の専門職大学院が東京理科大学、国土舘大学、大阪工業大学等に設置されている。国立大学では京都大学医学部に社会健康医学系専攻に知的財産経営学コースがあり、生命科学分野の技術を産業化する人材育成を目指し、東京工業大学イノベーションマネジメント研究科では技術経営における知財教育と研究に力点が注がれている。これらの事例は、既にマスコミにも紹介され佐大で計画中の農業を対象にしたMBA(経営学修士)にも活かされる可能性を有しており、実現には農学部、経済学部、理工学部、産学連携推進機構等の知恵が必要であろう。

会 員 の 情 報

会員の中で、これまで博士号を取得された方を紹介します。



服部 真彰さん

(S47年卒・畜産学)

- ①鳥類黄体形成ホルモンの多様性に関する生理学的研究
- ②博士(農学)
- ③九州大学(昭和55年)
- ④鳥類下垂体で生成される黄体形成ホルモンは少なくとも4つの分子数からなり、その分子多様性は遺伝子ではなく糖鎖構造に起因し、生物活性が異なることを明らかにした。
- ⑤九州大学大学院農学研究院教授

学位論文名	取得学位
学位授与大学名	学位論文の概要
現勤務先	



進藤 直文さん

(S48年卒・生物化学)

- ①「還元性物質(システイン、エルゴチオネイン、アスコルビン酸)の薄層デンストメトリーによる新規定量法の開発およびその応用に関する研究」
- ②博士(学術)
- ③佐賀大学
- ④還元性物質であるシステイン、エルゴチオネイン、アスコルビン酸の新規微量定量法を開発し、この定量法を用い3成分の野菜や果実中の含量、あるいは種子の発芽に伴う含量増減について研究し、新しい知見を得た。
- ⑤西九州大学



松本 勝さん

(S48年卒・生物化学)

- ①Strong antifungal activity of SS 750, a new triazole derivative, is based on its selective binding affinity to cytochrome P 450 of fungi
- ②博士(医学)
- ③東邦大学
- ④新規な triazole 系化合物 SS750 の病原性酵母に対する *in vitro* 抗菌作用を、標的酵素 P450_{14dm} 阻害と P450結合親和性の面から検討し、その作用メカニズムについて解明・考察したものである。(Antimicrob. Agents Chemother 46: 308 - 314 (2002))
- ⑤エスエス製薬(株)

支部 だより

「佐賀県庁支部先輩を送る会」を開催

佐賀県庁支部では、去る3月19日に佐賀市の「グランデはがくれ」で平成21年3月末をもって退職される7名の「先輩を送る会」を開催しました。

今回は、永年にわたって佐賀農業や農村の振興・発展に多大な貢献をされてきた田中正信さん（S46年卒 園芸学）、東島俊二さん（S46年卒 畜産学）、御厨初子さん（S46年卒 植物保護学）、村岡実さん（S46年卒 植物保護学）、牛草寛志さん（S46年卒 干拓学）、内海修一さん（S47年卒 農業経営経済学）、福岡直昭さん（S47年卒 干拓学）が県庁を退職されました。

当日は、「県庁支部旗」の下、先輩方を囲んでで会員約100名が県庁生活の思い出や苦労話を伺うなど、楽しい一時を過ごしました。

先輩の方々には、今後とも私達に対し、ご指導・ご鞭撻を願いますとともに、益々のご健勝とご活躍をお祈りします。

支部長 福島 末行（S50年卒・果樹学）



佐賀県支部に11名の新入会員加わる

佐賀県支部は、第2回総会を5月12日佐賀市の「グランデはがくれ」で会員30名が出席し開催した。

まず、昨年亡くなられた2名の会員への黙とうの後、江原支部長から「佐賀県支部は県庁退職者が中

心となっているが、県内在住で企業や団体等を退職されている方があれば、是非入会を呼びかけてほしい」とあいさつされた。

また、来賓として出席された野瀬学部長と山口農学部同窓会副会長から、農学部や同窓会の課題や情勢報告等の祝辞があった。

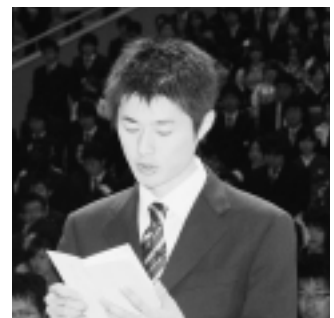
そのあとの懇親会では、昨年と本年3月に県庁等を退職して入会された新入会員の自己紹介があり、酒を酌み交しながら情報交換などで大いに盛り上がり、最後に「佐賀大学学生歌」- 楠の葉の - を斉唱した。



TOPIC 佐賀大学卒業式

佐賀大学の卒業式が3月24日、佐賀市文化会館であり、農学部171名、農学研究科38名が実社会へ船出しました。

全学の卒業生、修了生総代として生物生産学科の半田宗一郎さんが「夢を見失わず、自分の道をしっかり歩みたい」と決意を述べた。



TOPIC 佐賀大学入学式

佐賀大学の入学式が4月7日、佐賀市文化会館であった。農学部160名、農学研究科43名、合計203名が新たに本庄キャンパス生活のスタートを切った。



編集後記

・昨年、大学と同窓会との初めての意見交換会が行なわれましたが、主な意見として農業版 MOT のほかに、大学の中長期ビジョン、海浜台地生物環境研究センターの組織見直し、教職員の定数削減などが出されました。今後、同窓会として農学部が抱える課題解決などに、どういう協力・支援ができるか考えていかなければならないと思います。

・本年は5名の先生が退職され、各々の先生にはお忙しい中、同窓会員にメッセージをいただきました。心から感謝申し上げるとともに、諸先生方の今後のご健勝とご活躍をお祈りします。（K）